

渡航医学と薬剤師～日本におけるグローバルファーマシー構想

Global pharmacy project in Japanese travel medicine

濱田 篤郎

東京医科大学病院 渡航者医療センター

欧米諸国でトラベルメディスンが発展した理由の一つに、薬剤師の積極的な関与をあげることができる。たとえば1990年代後半にスイスのCommunity Pharmacistを対象に行なった調査では、半数以上の薬剤師が毎月2~3回の頻度で海外渡航者に健康情報を提供していた。提供する情報の内容としては、マラリア予防やワクチン接種の指導など高度な知識を要するものが多く、薬剤師が日頃からトラベルメディスンの教育を受け、最先端の情報を入手している状況が明らかになった。

日本でも海外渡航を計画した者が、地域の薬局を訪れて携帯医薬品などを購入する機会は多い。たとえば、我々が2016年に東京国際空港の出国前ラウンジで行った調査では、日本人渡航者（成人：450名）のうち、ワクチン接種を受けていた者は僅か5%以下だったが、医薬品を携帯していた者は80%近くにのぼった。

このように、日本では海外渡航前にトラベルクリニックを受診する渡航者は少ないが、薬局を訪れる渡航者は多い状況にある。そこで、各地域の薬局などにおいて、薬剤師の方々に海外渡航中の簡単な健康指導を行っていただければ、日本国内でトラベルメディスンをさらに普及させることができるだろう。さらに、ワクチン接種や詳しい健康指導などを希望する者には、薬局経由でトラベルクリニックを紹介するといったシステムが効果的ではないかと考えている。

日本渡航医学会では、こうした薬剤師の方々の積極的な関与が、日本でのトラベルメディスンの普及に欠かせないものと考えており、学会事業の一つとしてグローバルファーマシー構想（仮称）を検討している。今回のシンポジウムにおいては、本構想を具体的な事業として稼働させる方法などについて、多くの方々からご意見をいただきたい。